



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

# アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.119  
2013.8.1

\*考古学研究所(株)アルカは石器と土器の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

● 神村 透

田舎考古学人回想誌

32

## 「悩む卒業後 東京在住? 信州帰郷? 結局信州へ」

当時の日記を見ると 卒業後について書くようになったのは1956年1月 卒論提出以後である。4年生の殆どの日々は卒論だけに自分の気持ちが集中していた為である。

考古学講座の仲間は戸沢充則・塚田光・渡辺兼庸君等と私の4人でした。卒業後について何度も話した。皆考古学への思いは強く勉強を続けたいと考えていた。戸沢君は杉原荘介先生の将来は大学研究室要員と言う考えもあって大学院進学が決まっていた。塚田君は家業の印刷所を手伝いながら大学院へと言う。渡辺君は東洋文庫に就職が決まっていた。迷っていたのは私で大学院に進学して考古学を学びたい気持ちがあった。が 弟が横浜国大に入学したので親の経済的負担を増やせない。外国語が苦手な私は大学院が外国語を二つというには無理だと考え悩み迷う。本心の一番の壁 こだわりは戸沢君の存在でした。高校時代からずっと私のライバルであり、いつも私の一歩前にいた戸沢君。今回は杉原先生の囑望する存在の戸沢君。とても無理と思った。

56年1月16日「午前中本を読んで寝る。何もしないで、する気になれない。そして迷う。大学院というつまらないもの。そして東京というあたりが。畜生。田舎へ帰るといふ決心は何時つく。大学院どうしたものか。どうせ受からない。でも戸沢君には負けたくない。それが本音だけれど。」

1月19日「塚田君の所に行く。久しぶりに10時半まで話をする。考古学その他の問題で。楽しかった。田舎へ帰ることによりやく決心がついた。帰ろう。学者にならなくてもよい。考古学ができれば。」

1月下旬の考古学研究室創立記念祝賀会兼卒業生送別会で、私は信州に帰って考古学界のボス(トップ)になると発言した。

この頃と思う。塚田君のノートをみて写した一文がある。『真実に生きる者は常に問題を持つ。誠実に恥じない生活と不断の真理の要求は人間の生きるための唯一の使命である。自己に 社会に誠実たれという。しかしそれは困難なことだ。だが如何に苦しくとも人は一歩も退いてはいけないのだ。又 真実を愛し、真理を求める者は常にあらゆる障害を勇気をもって乗り越えなければならない。人間の歩む道はかくも苦しいのだ。』と書き。私よりも人間性について深く考えているのを知り驚いた。同じメモ帳に私は教師でも考古学は出来ると書いていた。

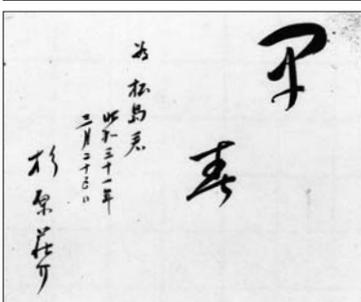
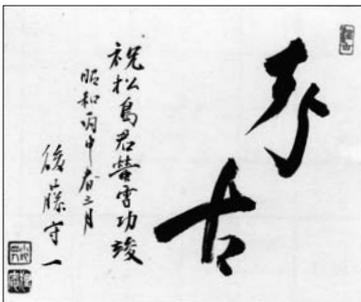
当時は考古学での職場は無かった。地方の田舎で研究が出来るといえば学校教師しかなかった。父に言われ中高の社会科教員資格を取るが、何故か高校教師を考えず義務中学校を考え、長野県の教員採用試験を受け合格。中学校長の父に愛知県境の学校を頼み、2月10日に売木小中学校に決まった。

2月29日 論文審査 杉原先生に長時間しぼられた。卒業 とても悲しくなった時もある。妙なものだ。早く仕事をしたい。と 心は田舎に飛んでいた。

3月25日「今日は卒業式だ。ただその事実を知るのみで、中々卒業という感慨がおこらない。下宿で赤飯をご馳走になり、卒業式もじっと聞く。免状を貰うが嬉しいという気がし無い。まだ東京にいる故かもしれない」

26日「今日東京をいよいよ引き上げることにする。悲しさ・淋しさがまだ実感とならない。社会生活が変わったときに初めてその実感が身にしみると思う。新宿駅に杉原先生が送ってくれる。有り難いなと思った。塚田君・戸沢君・渡辺君。それに下宿の中根おじいさん・健さん・靖君も送ってくれる。嬉しい。それにしても思い出の少なかった東京。とても4年間で短く、そして全てでは無いが楽しかった。」信州に帰郷した私でした。

※巻頭連載は隔月です。次回は塚本先生です。



▲後藤守一先生(上)、杉原荘介先生(下)よりいただいた大学卒業祝いの色紙

### 目次

■田舎考古学人回想誌 悩む卒業後 東京在住? 信州帰郷? 結局信州へ 神村 透 …1	■リレーエッセイ マイ・フェイスレット・サイト(第112回) 江口 桂 …3
■考古学の履歴書 公務員としての考古学研究者(第11回) 石井則孝 …2	■考古学者の書棚 「世界資本主義 I」 西井幸雄 …4

## 考古学の履歴書

## 公務員としての考古学研究者(第11回)

石井 則孝

「漁師の「アテ」という言葉を知っていますか?」

## 1. 漁師のいう「アテ」とは

漁業を営む漁師さんたちの「アテ」というものをご存知でしょうか。港や海岸に住み、漁業で生計をたてている人々は、毎日が海との戦いである。何故かといえば、科学の発達した現代でも毎日小舟で大海原へと近海魚の網打ちや釣りに出掛けている。小舟には、方向指示器も魚群探知機もついていない。それなのに、はるか遠くの沖へと漁に出掛けても自分の港・海岸へ帰りつけるのは何故だろうかと考えたことがありますか?これが漁師1人1人が持っているアテなのである。

現代社会では、陸上では道路・鉄道が走り何処にいても自分の家に帰ることができる。原始・古代の人々の帰巢本能というものを考えてみるのが今回の話なのである。

## 2. 海と陸

人が定住するようになると、ムラとムラの往還がはじまる。道というものが開けてくる。これは地上での話であって、さて海の道はどのようにしてつくられていったのだろうか。

今年6月富士山が世界文化遺産として登録された。富士山は、関東・甲信越のどこからでも天気の良いれば見ることができる。富士山こそ日本最高最大のアテなのである。

私が木更津に住居をかまえ、千葉県で働いていた頃、貝塚の分布調査を行ったことがあった。縄文人たちは、どのようにして海に漕ぎ出し、どのようにして大きな鯨などを捕っていたのか。そこでどのようにして自分の集落に持ち帰っていたのか不思議でしかなかった。そこで富津の漁師の方に「みなさんあんなに遠く沖へ行ってどうやって帰ってくるのですか?」質問したところ、「一人一人がみんな自分のアテを持っているのだよ」との答え、「アテとはなんですか?」と聞いたところ、「その岬のところの浅間神社がワシのアテだよ」との答が帰ってきた。他日、簀立て漁の際小舟に乗せてもらい、このアテを海上から教えてもらった。それは、富津海岸に流れ出る小糸川の河口近くにそそり立つ岬の上に立つ建物、それが浅間神社であることを知った。岬は小高く盛り上がり、大きな松の木もあり、沖へ出ても本当に良く見えた。「アソコをめざして舟を進めていけば自然と船着き場へ着いてしまうよ」浅間神社は海の神様でもあるし、何も心配することはないのさ」これが答で、私はアッケにとられて聞いていた。

## 3. 金鈴塚古墳の石室の石材は?

証城寺で有名な木更津には、千葉県を代表する金鈴塚という前方後円墳が田んぼの中にあることは誰でも知っていることであろう。金鈴塚の石室は、石無し丘陵の房総半島であるがゆえ、貝化石の固った砂岩で構築されている。この石は半島の北の方の木下<sup>キオロン</sup>というところが原産地で、江戸川(旧利根川)から舟でいったん東京湾へ運び出し木更津海岸まで運んだものである。この木更津には、アテとして太田山という小高い島状の丘がどこからでも見ることができる。木更津の漁師に聞いたところ、みんなアテは太田山だという答が返ってきた。この太田山の背後には、縄文時代中期から後期の祇園貝塚という広大な貝塚が存在していた。木更津工専の東側の台地であったが全て破壊されてしまった。さらに北へ行くと弥生時代の菅

生遺跡が存在している。また太田山の崖には無数の横穴が掘られている。この太田山のアテを中心として、原始古代から明治の時代まで、東京湾の中心都市として栄えてきたのである。

つまり、アテというものは、30,000年以前の旧石器時代から存在し、人々の住居の原点となっていたものと確信している。

## 4. 遺物や集落からアテを考える

多摩ニュータウンを掘っていた頃、旧石器時代の遺構が何ヶ所も発見されていたが、その中に、石器以外に原石として運ばれてきた拳大のものが数点あった。原産地を調べたところ、長野県の和田峠産であることがわかった。そこでどのようにして多摩の地まで運ばれてきたのか真剣に考えたことがあった。というのは、長野県の霧ヶ峰高原で発掘していた時、黒曜石に混って大きな白石状の石塊が出土した。この時は京大の山中一郎さんも参加していて大変興味を示されていたことを記憶している。調べたところ新潟県産ということが判り、交流の歴史が旧石器時代から始まっていたことを確信したのであった。藤森栄一さんが「かもしかみち」という名著を出された時夢中になって読んだことを記憶している。そこで私は、集落の形成は、どのような自然環境の中でつくられていったのかを長年のテーマとして考えてきた。石を運べる丸木舟が通れなければ集落は完成しないとの結論を得ている。私の家の近くには、神田川と合流する妙正寺川と石神井川が存在している。川の流れは、原始の世界からそれほど流路は変わっていないと信じている。河口から湧水地点まで歩いてみると、丸木船が入るところまでは、縄文集落が存在しているが、船が入らなくなると、住居も2~3軒にとどまってしまう。このことは、妙正寺川、三鷹市を流れる多摩川へそそぐ仙川でもしかりで、縄文人の知恵のほどが良くわかるのである。

東京湾へ流れこむ河川の流域には、旧石器時代から縄文時代の遺跡が相当数存在しているが戦前(1945年以前)と戦後ではすっかり環境が変わり、流域の遺跡調査が困難になってしまったが、残された遺跡からみても「モノを運ぶ」という縄文人の知恵を伺い知ることができるのである。

## 5. 東京湾をめぐる縄文時代の「アテ」

時代が下って7世紀に入ると、関東平野は安房・上総・下総・常陸・下野・上野・甲斐・武蔵・相模の9つのクニが制定される。大きな河川をクニの境界として定めていったことがわかる。溯って旧石器・縄文時代の人々はどのような山々を「アテ」と定めていったのだろうか?その第一番は富士山であることは間違いないことであろう。関東平野・山地の著名な山々を列記してみる

略歴	
1936年	東京鷺宮に生まれる
1964年3月	早稲田大学大学院文学研究科芸術学専攻修士了
同年3月1日	文化財保護委員会記念物課(現文化庁)へ入省
同年5月1日	奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部へ異動
1970年4月1日	千葉県教育委員会へ異動
1980年4月1日	東京都教育委員会へ異動
1996年7月15日	東京都埋蔵文化財センター所長で定年退職。公務員生活終了
この間、筑波大学・早稲田大学等9大学の非常勤講師を歴任。昭和女子大学は70歳定年まで22年間勤務	
2001年4月1日	帝京大学文学部専任講師
2007年3月	定年退職

縄文人になったつもりで、東京湾・相模灘から陸上をながめてほしいものである。東京や神奈川からはるか離れた島々に原始古代の遺跡が数多く存在していることがわかってくることだろう。

### おわりに

仕事柄、人生の楽しみのひとつとして、世界の遺跡めぐりの旅を一年に一回は行って来た。小学生時代、死ぬほどの悲哀を味わってきたせいかアメリカとロシアへは行く気が起きな

い。これをトラウマといってしまうば簡単ではあるが不思議な精神状態である。50年前、日本ユーゴスラヴィア協会青年部にチトー大統領から世界青年友好祭への招待状が届いた。バルカン半島探検を計画していたので、富士重からスバルサンバーの提供受け実行することができた。この記録として同僚の土田純二氏との旅行記「陽気な無宿旅行」を喜寿となった今年記念碑として復刻した。ギリシャ、トルコ、イラン、インド等、私の世界の遺跡を尋ねる原点として活用している。

隔月連載です。今回は渡辺誠先生です。

## Uレーエッセイ

### マイ・フェイス・サイト 112

## 府中市指定文化財(史跡)旧陸軍調布飛行場白糸台掩体壕 ~ 東京都府中市 — 江口 桂

今回は、あまり本欄で紹介されることのなかった「戦争遺跡」を取り上げます。

東京都庁のある新宿から、国道20号線を西へ走っていると、味の素スタジアムを過ぎた西武多摩川線の陸橋の左側にコンクリート製のかまぼこ型をした変な建造物があります。お恥ずかしい話ですが、私は、府中市に勤務するまで、この変な建造物を「掩体壕」と呼ぶことさえ知りませんでしたし、まさか武蔵国府のまち・府中市で、掩体壕の調査から保存・整備を担当することになるとは夢にも思ってもいませんでした。

そのきっかけは、今から15年前の平成10(1998)年、今は亡きY先輩が教育委員会の埋蔵文化財担当主幹として着任された際、「江口君、白糸台にある掩体壕の保存運動が始まるらしい。今まで調べた資料をあげるから、あとは宜しく。」と渡された1冊のファイルでした。そこには、白糸台掩体壕の概要やその当時の国や東京都の戦争遺跡の保存に関する考え方、全国の掩体壕の一覧などがまとめられていました。

それ以降、地元郷土史家(市議会議員)等の市民から話を聞いたり、全国で初めて市の指定文化財として保存整備された大分県宇佐市城井1号掩体壕を見に行くなど、掩体壕を実際に調べる機会が増えて行ったのです。そして、平成14(2002)年には、地元市民主体の「調布飛行場の掩体壕を保存する会」から府中市長あて掩体壕の保存陳情書が提出され、掩体壕の保存に向けた取組が始まりました。

さて、掩体壕とは、太平洋戦争中の軍用飛行場とその周辺に、敵の空襲や爆撃から飛行機を守るために建設された格納施設のことを指します。伊藤さんの研究によれば、本来、軍事用語では、戦場で敵の銃砲撃や爆撃から防御しつつ攻撃するための壕を掘削し、その周囲に土壘を築く施設を「掩体」と呼び、単に防御し退避する施設を「掩壕」と呼んでいました(伊藤2003)。飛行機用掩体は、戦闘機や爆撃機を空襲から防護するために設けられた施設であることから、用語としては「掩体」が正しいといえますが、当時「掩体壕」と呼んでいたという地元の証言や、広く一般名称としての「掩体壕」が定着していることもあるので、「掩体壕」と呼んでいます。

太平洋戦争の末期、旧陸軍の帝都防衛と都市計画上の重要施設とされた調布飛行場(昭和16年4月竣工)には、米軍の本格的な空襲に備えるために、多くの戦闘機が配備されていました。これらの戦闘機の格納施設として、調布飛行場の滑走路の周辺に、コンクリートや土で造られた掩体壕が60基ほど



掩体壕調査風景

あったと伝えられてきましたが、戦後70年近い間に、それらのほとんどが取り壊され、現在は、府中市と三鷹市に2基ずつ、計4基の掩体壕が残っているだけになっていました。このうち、三鷹市の2基は、地元市民の要望等によって、都立武蔵野の森公園敷地内で保存されていますが、内部の鉄筋が除去され、保存状態が悪いため、現在、内部への立入は禁止されています。これに対して、府中市の2基は、所有者の方が外面にモルタルを塗るなどの処置を施してきたこともあって(うち1基は、掩体壕を覆うように工場が建設されています)、良好な状態で保存されてきました。

府中市では、平成14年以来の地元市民等の要望を受けて、平成18年の平和都市宣言20周年を機に、市内にある2基のうち、白糸台に所在する掩体壕を公有地化し、市の指定文化財として保存することを決定しました。平成10年当初は、まさか戦争遺跡が公有地化できるとは思っていませんでしたが、野口市長(平成18年度当時)の英断の結果と言えます。

平成19年度には、市の文化財に指定し、保存・整備を行うための確認調査を行いました。その結果、規模が格納されていた戦闘機「飛燕」の寸法とほぼ同じ大きさに造られていたこと、内部中央には、タイヤの痕跡が何条も残っており、実際に機体を収納していたこと等が判明し、構築過程の復元も行うことができました。また、コンクリートの劣化状況を調査するための中性化試験を行った結果、コンクリートの強度は高く保たれ、鉄筋の防錆等の修理を行えば通常の状態では安全であることがわかりました。

その結果を受けて、府中市では、平成20年11月に、旧陸軍の掩体壕としては全国で初めて、市の史跡として白糸台掩体壕を文化財に指定し、保存整備を行うことが決まりました。

平成21年度には、外壁コンクリートの補強劣化防止処理、内壁の露出鉄筋防錆処理等を実施し、平成23年度に保存整備工事を実施して一般公開を行っています。

保存整備の実施にあたっては、①遺構の保存を前提としながら、そのままの状態を生かした史跡公園的な整備を行う。②解説板は、写真や絵を使うなどビジュアル的にわかりやすいものとし、調布飛行場全体の歴史や当時の状況を説明する。③安全管理上、掩体壕の内部に入れないようにフェンスで囲うが、特別公開時には中に入ることができるようにする。④史跡へのアプローチとして、最寄駅からの誘導・サイン表示を設置する。⑤極力周囲との高低差を見直し、車椅子の入場に配慮する等のバリアフリー化を行う。などの方針を立てました。特に、②については、近隣市である三鷹市、調布市に呼びかけ、調布飛行場周辺の3市にまたがる戦争遺跡等の散策マップも作製しました。

近刊の坂詰先生の著書でも、「白糸台掩体壕(東京都府中

市)の発掘を伴う保存整備は、行政が太平洋戦争時の資料を積極的に公有化し、将来に伝える識見として評価される…(後略)」と書かれています。白糸台掩体壕を長い歴史と伝統あるわがまち府中の、次世代を担う子供たちの歴史教育の重要な財産として保存・活用していくことは言うまでもありませんが、本年10月には、多摩国体(スポーツ祭東京2013)が白糸台掩体壕のすぐ近くにある味の素スタジアムをメイン会場として開催されます。全国各地から本市へいらっしゃる多くのお客様にも、この貴重な戦争遺跡である白糸台掩体壕を知っていただき、平和の尊さを見つめ直す貴重な文化財として活用されることを望む次第です。

[文献]

伊藤厚史 2003「飛行場施設からみた本土決戦準備の様相-滋賀県八日市市布引丘陵の掩体調査を中心に-」『水野正好先生古稀記念論文集続文化財学論集 第二分冊』文化財学論集刊行会

坂詰秀一 2013「市民の考古学-10 歴史時代を掘る」同成社

※今回のマイ・フェイバレット・サイトは井澤 純さんです。

## 考古学者の書棚

### 「世界資本主義Ⅰ」

岩田弘／批評社(2006)

西井 幸雄

本欄の趣旨から逸脱するかもしれないが、経済学の本を紹介する。考古学をなりわいとしている人の多くは、大学で考古学を専攻しているが、中には他学部の出身者も何人かいる。小生も大学の専攻は経済学であった。そう書くと、大学時代に経済学を少しは勉強していたのかといわれると、殆ど発掘現場に入り浸っており、勉強らしいことはしていない。しかし、ゼミの先生の本ぐらいいはページをめくっていた。

昨年、岩田弘先生が他界された。大学でお別れ会があり久々に当時のゼミ仲間と五味先生に会う機会があった。卒業後、岩田先生が書いた本を何冊か送ってもらっており、ここに紹介する本もその1冊である。

本書は1964年に刊行した『世界資本主義』の増補版として、2006年に半世紀以上を経て執筆された。本書は先生の最初の仕事であり、また最後の仕事になった。しかし、内容は大きく変わっており、本の厚さは倍以上になる予定であったが、刊行されたのは『世界資本主義Ⅰ』だけで『世界資本主義Ⅱ』に関しては構成のみで未完に終わってしまった。

本書は64年以降の世界史的事件を歴史的に総括するのが目的で、サブタイトルは「情報革命と新資本主義の登場—グローバルネットワーク資本主義としての新資本主義 資本論体系の今日的意味を問う—」となっている。

岩田先生は宇野学派の一人と思われている。宇野弘蔵は戦後マルクス経済学の理論的指導者として重要な位置を占めている。宇野理論は理論的展開と歴史的展開を分離し、原理論、段階論の研究手続きを通して資本主義諸国家相互の現状を具体的に分析するという三段階説をとっている。段階論では資本主義を「重商主義」「自由主義」「帝国主義」に時期区分し、自由主義段階はイギリス、帝国主義段階はドイツを典型国家として分析を行っている。なお、自由主義段階の純化傾向が継続すれば理論的に「原理論」になって行くとしたことで「純粋資本主義論」と呼ばれる。

一方、岩田先生は『世界資本主義』で宇野批判を展開し、

典型的国家だけで資本主義が成立するのではなく、各時期はそれぞれの発展段階の国家によって構成されているのが資本主義であり、その構造を分析するため「世界資本主義論」を展開した。

本書の構成は

#### 第1部 情報革命・新産業革命と新資本主義の登場 — 『資本論』体系の今日的意味を問う

第1章 二つの世界戦争とその戦後産物としての現代資本主義

第2章 新産業革命の開始と現代資本主義の分極化

第3章 『資本論』体系の今日的意味を問う

#### 第2部 『資本論』体系と資本主義

第1章 資本主義の世界性と『資本論』体系

第2章 世界市場と資本主義的生産

第3章 価値法則と生産価値

第4章 株式資本と金融資本

第5章 帝国主義と現代資本主義

近年、私たちが学生時代に各研究分野で指導的役割を果たしていた人たちの死亡記事を新聞でよく目にする。戦後知を指導してこられた人達がいなくなるのは寂しく、一つの時代が終わったと感じる。歳とともに好奇心も衰え、考古学の本を読むことも少なくなり、ましてや他分野の本を読むことは殆ど無くなっているが、岩田先生の亡くなられたのを機に再読しようと思っている。

### アルカ通信 No.119

発行日 2013年8月1日  
企画 角張淳一(故人)  
発行所 考古学研究所(株)アルカ  
〒384-0801 長野県小諸市甲49-15  
TEL 0267-25-0299  
aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp